五塚原古墳後円部北東斜面の調査

所　　在　京都府向日市寺戸町芝山 3-1･6 ほか　調査期間　平成 27（2015）年 9 月 28 日～平成 28（2016）年 1 月 15 日（予定）

調査所管　向日市教育委員会　　調査機関　公益財団法人向日市埋蔵文化財センター　（担当　梅本康広･中島信親）

調査協力機関　立命館大学文学部　寺戸財産管理会　寺戸町連合自治会　大牧自治会　向日市公園住宅課、総務課

１　はじめに

当センターでは向日丘陵古墳群の保存と活用の方法を探る目的で、五塚原古墳を対象に墳丘の遺存状況と範囲、内容の確認調査を実施しています。

立命館大学と協同ですすめてきた発掘調査は平成 12(2000)年に始まり、6 次の調査が行われてきました。これまでの調査成果によって、墳丘の構造は後円部が 3 段、前方部は 2 段で、前方部の形状は細くて長い「バチ形」を呈し、斜面途中に「斜路状平坦面」を備えるなど箸墓古墳と共通した墳丘の築成方法が確認され、最古型式前方後円墳のひとつであることが明らかにされています。

墳丘の規模は全長 91.2m、後円部径 54m、同高 8.7m、前方部長 40.5m、同前面幅 33m、同高 2.1～4.0m（くびれ部付近から前方部頂）、くびれ部幅 15mの復原値が得られてきました。

今年度は後円部東側斜面に第 1 調査区、北東側斜面に第 2 調査区を設定し、後円部の形状と段築の構造、墳丘外周の状況、古墳に伴う遺物の有無を把握するために調査を実施しています。

２　調査の成果

〔第１調査区〕　墳丘の南北中心線から東へ 90 度の方向に設定し、後円部の東側面の形状及び段築構造、葺石・礫敷の遺存状況、墳丘の範囲を確認するために設けました。

墳丘斜面は裾から墳頂までのあいだに、途中二箇所に平坦面を設けて三段に築かれています。斜面の勾配は各段ともに裾から急角度で立ち上がったのち、緩傾斜に変化しています。葺石は斜面下半部に遺存しています。斜面上半は葺石が脱落して墳丘の盛土が露出しています。また、基底石やその直上に施された葺石は一部で、樹根の進入などの影響を受けて倒壊したり、大きくせり出すところがみられます。

検出した各段の規模は次の通りです。

第一段斜面長（水平距離）4.5m、高さ 2.3m、第二段斜面長 4.3m、高さ 2.6m、
第三段斜面長約 6m、高さ 3.4m（推定）

墳丘裾の基底石は、長さ 0.5m、高さ 0.3mの大きな石材を横に据え置き、南へ二石つづけて大振りなものを列べています。これら三石の両側にはさらに小さな石材を置くだけで、裾が明瞭につくられていません。この位置は後円部が最も東側へ張り出す場所にあたることから、葺石施工の作業単位として、あわせて墳丘の要所を明示する象徴的な意味を持たせて大きな石材を使用している可能性があります。また、裾から急角度に立ち上がる斜面勾配が最も高くなる場所にもあたり、「石の山」に仕上げる墳丘全体を立体構造物として、見栄えよく整える技巧が随所にみられます。基底石の外側には礫敷が 1.5m幅で設けられています。

墳丘斜面途中に設けられた平坦面は、各平坦面ともに幅 1.0m分を確認しました。その上面には礫径５㎝未満、10 ㎝、15 ㎝の異なるサイズのものが混在していますが、これらの礫を隙間なく詰め込んで平坦な礫敷がつくられています。

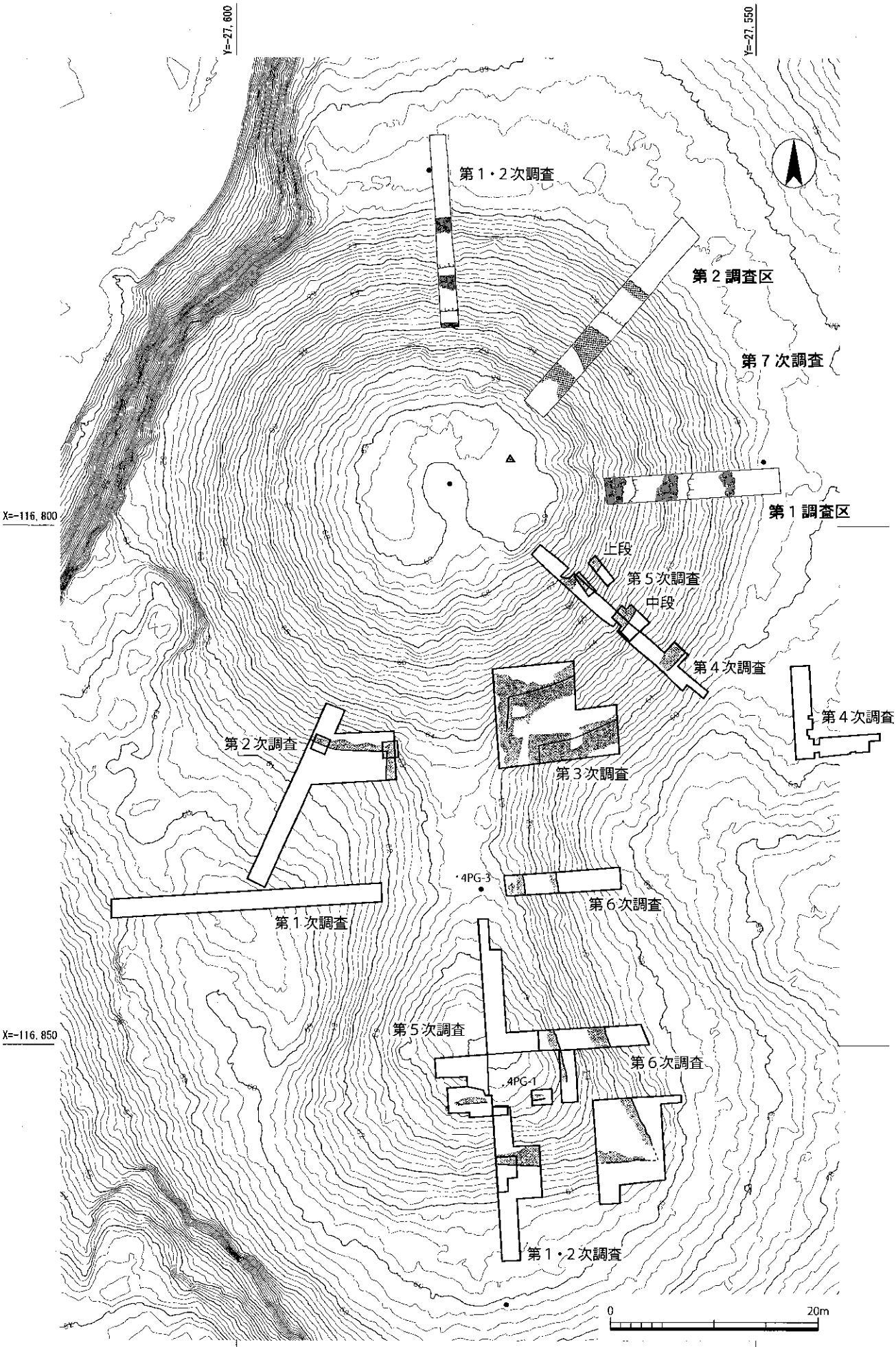


図１　調査区設定図（1/500）

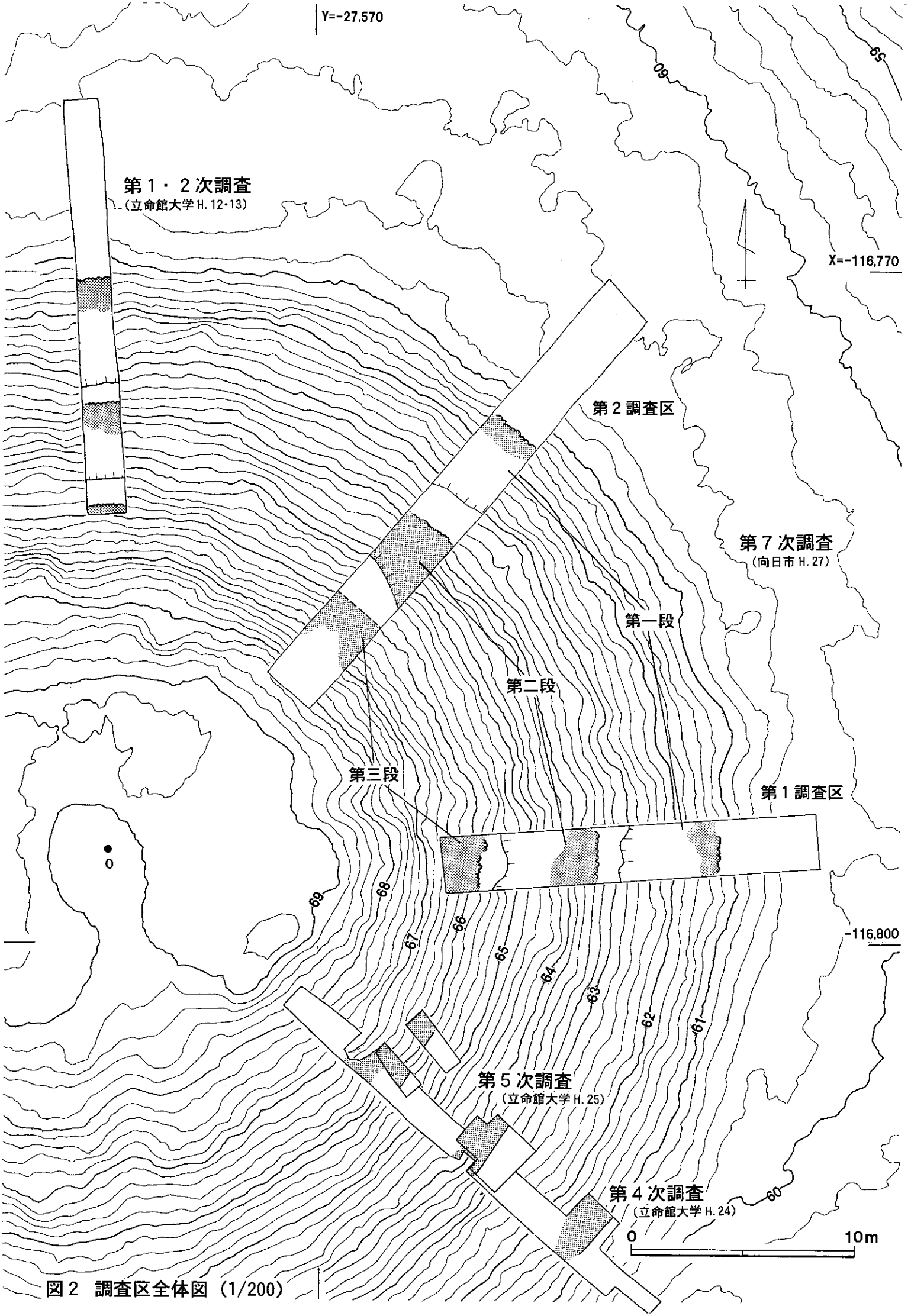


図２　調査区全体図（1/200）

〔第 2 調査区〕　墳丘の南北中心線から東へ 45 度の方向に設定し、後円部の北東側面の形状及び段築構造、葺石・礫敷の遺存状況、墳丘の範囲を把握するために設けました。斜面の勾配は裾から 0.5～1.0mまでが急角度で立ち上がり、上部の平坦面までは緩傾斜となります。検出した各段の規模は次の通りです。

第一段斜面長 4.5m、高さ 2.2m、第二段斜面長 4.0m、高さ 2.2m、第三段斜面長約 6m、高さ 3.4m

墳丘裾の基底石は、長さ 0.2～0.4m、高さ 0.15～0.3mの石材を縦もしくは横に据え置いています。基底石の列びに大振りの石材を用いず、葺石サイズの礫が充填されている箇所がみられ、葺石施工上の区切りとなる調整箇所である可能性が考えられます。基底石の外側には礫敷が 2.0m幅で設けられ、さらに外側は丘陵地形を削ってできた平坦な地面が広がっています。

墳丘斜面途中に設けられた平坦面は、幅 1.0～1.7m分を確認しました。礫敷に使用された礫の大きさは５～10 ㎝ほどで隙間なく詰め込まれています。

今回の調査でも古墳に伴う遺物は全く出土していません。一方で、宝菩提院廃寺に関わる平丸瓦、長岡京期の土師器皿、平安時代前期の緑釉・灰釉陶器などが出土しており、古墳築造後には墳丘を再利用していた可能性が考えられます。

３　調査の意義

調査成果は、次の３点にまとめることができます。

①後円部の平面形態がほぼ円形に復原できること、

②後円部は丘陵地形を削り、平坦地を設けて築かれていること、

③古墳に伴う遺物は出土しなかったこと、

①については、これまでの調査成果を総合して、後円部の形状をほぼ円形に復原することができます。その規模は、直径約 54mに想定できます。ただし、くびれ部側でやや内側に墳丘裾が入り込む形をとるため、実際には長径（東西）約 54m、短径(南北)約 51mという計測値が得られます。

②では、後円部の北東側でも墳丘裾が標高約 61m付近を示し、墳丘の東半分は裾の高さを揃えて築かれていることが確認されました。

③からは、本墳の墳頂に埴輪を並べていた可能性は低いと考えられます。また、土器については前方部に置かれていたことを想定するのは難しく、後円部にのみ可能性が残されます。

五塚原古墳の墳丘の特徴は、「斜路状平坦面」に象徴される前方部と後円部が分離した段築構造に集約されます。後円部の平坦面はほぼ水平にめぐりますが、前方部とはつながっていません。このような墳丘の不整合は、奈良県桜井市箸墓古墳の特徴的な構造とみられ、全国で総数約 5200 基の前方後円（方）墳のなかで 2 例しか確認されていません。なお、前方部の平面形態は、纒向古墳群中の東田大塚古墳で復原されている輪郭線と近似していることが、昨年の調査の後に検討をすすめ明らかになりました。箸墓古墳以外の古墳とも比較検討が可能になってきました。

今回、後円部はほぼ円形を描く段築構造であることがわかりましたが、箸墓古墳と同時期の古墳で後円部が精美な円形に三段まで築かれた例は現状では他に確認されていません。後円部三段、前方部二段の墳丘構造としては最も古い古墳のひとつとみられます。

箸墓古墳と五塚原古墳は墳丘の大半が盛り土で築かれており、その造営にあたっては計画的な施工基準と高度な土木技術が採用されていたと考えられます。出現期の前方後円墳のほとんどは、墳丘の損壊が著しく不明な点も多いため、五塚原古墳のように墳丘が完存する事例を通じて明らかにされる問題も少なくないと思われます。

五塚原古墳第７次調査現地説明会資料参考図

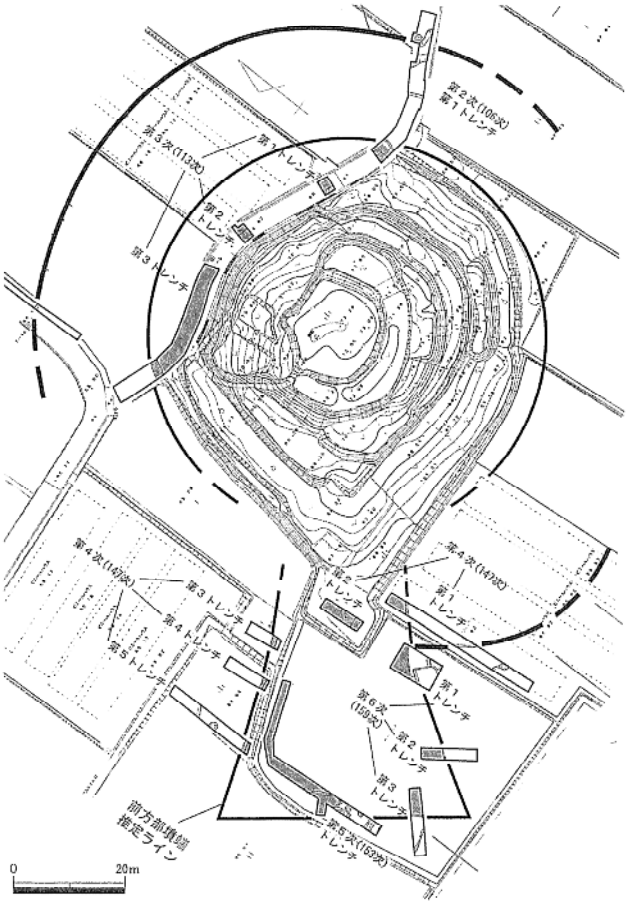


図１　纒向東田大塚古墳の墳丘復元図（1/1333）

桜井市教育委員会 2011 を改変

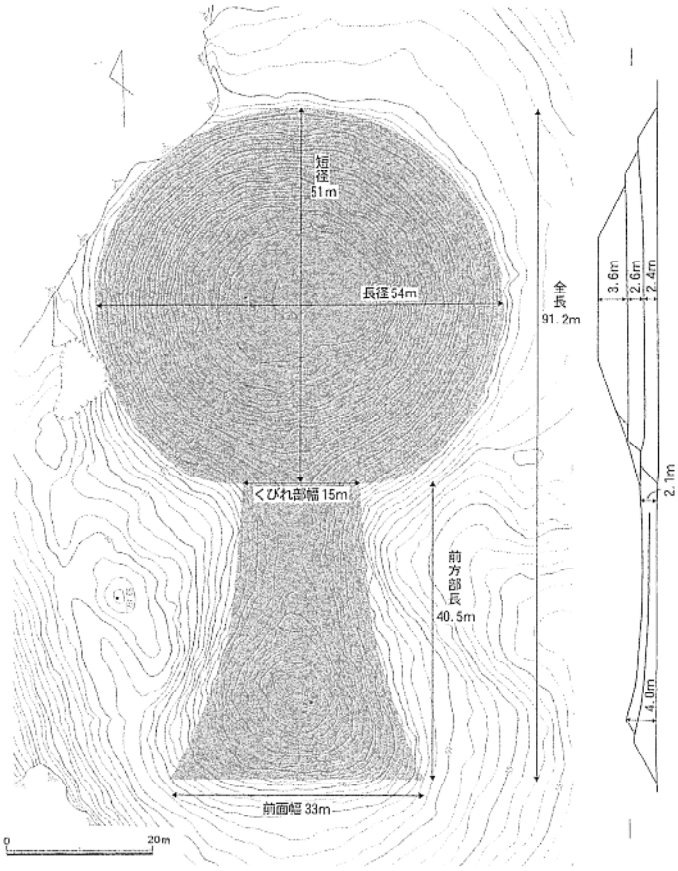


図２　五塚原古墳の墳丘イメージ図（1/1000）

向日市文化資料館 2004 をもとに作成

※図２の平面形の復原イメージは 2004 年に作成したものですが、現在までのところ大きな変更を必要としないため復元図が作成されるまで暫定的に使用します。

後円部４段前方部４段

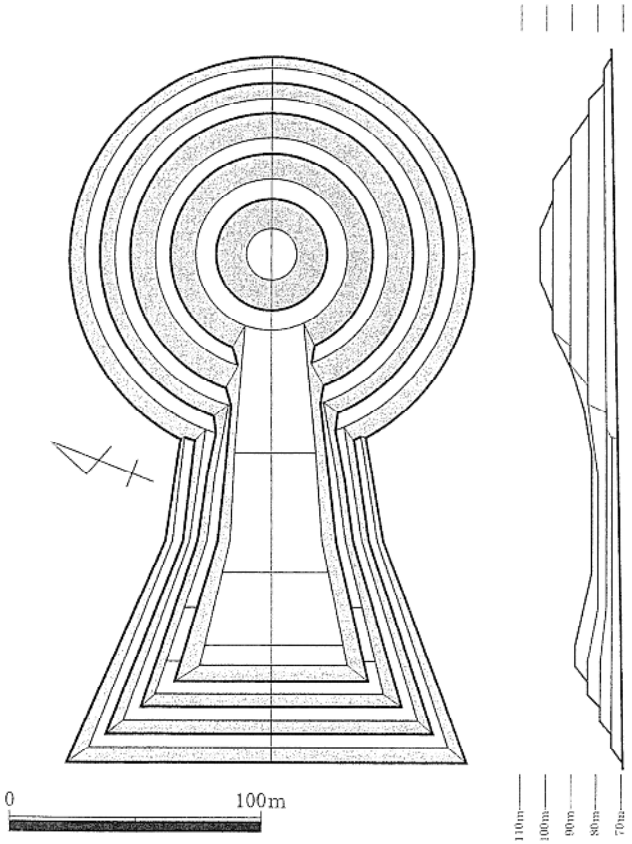
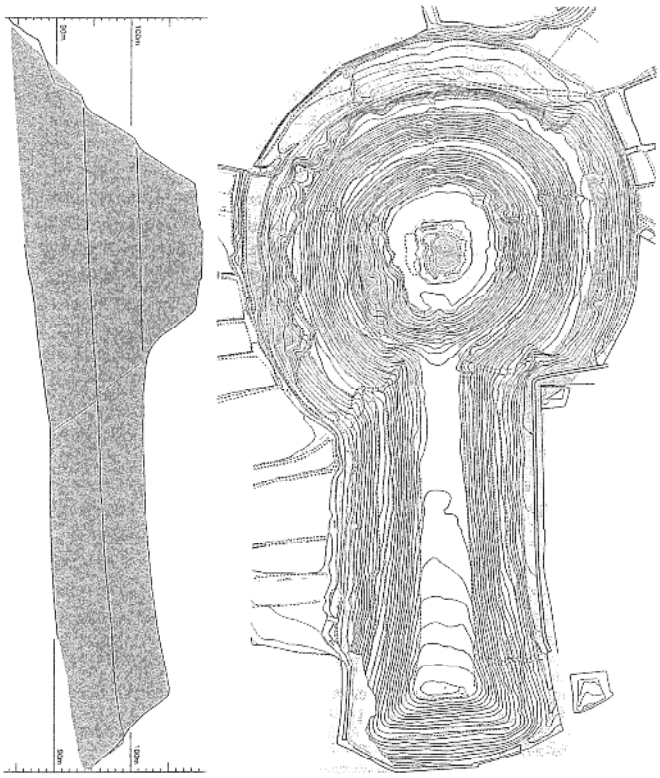


図３　箸墓古墳の墳丘復元案（1/3000）

桜井市立埋蔵文化財センター2014 より



後円部３段前方部２段

図４　桜井茶臼山古墳の墳丘復元案（1/2000）

大阪市立大学日本史研究室 2005 より